

「青少年のための科学の祭典」は、「青少年に科学の魅力を体験してもらおう」とのねらいで、平成4年(1992年) 東京・名古屋・大阪で行われたあと、国の委託事業として、平成12年(2000年)までに全都道府県を一巡しました。これがきっかけとなって、各地で継続されています。夏・秋・冬・春と、開催期間はまちまちですが、今年も31都道府県57会場で行われました。新潟県内では燕・弥彦大会も行われました。

新型コロナの第八波の始まりの兆しもあり、来場者も少ないのでは、との危惧をよそに、今年の上越大会は、2021年より4つのブースを増やして15のブースでの開催で、来場者は2日間で3,044人にのぼりました。

新潟支部は、以前から上越大会に参加し、近年は毎年「雲の模型を作ろう」で出展しています。

新潟県は、上越と北陸という二つの異なる新幹線が通るほど、圏域が広く、しかも上越市は県都から130kmも離れていて、交通も不便で、行き来が大変なのですが、今年は、一日だけの参加にして、しつこく呼びかけたのもあったのか、5人のスタッフが集まり、無事、実施できました。

なだれ実験も、スタッフがもっと多かったら実施したいと思いましたが、断念しました。会場は案外狭く、実施は難しかったかも知れません。

阿部副支部長はペットボトルの水竜巻、雲作り実験、パソコンでの天気から水の振る舞い、色んな雲、大気光学現象など多様な解説も交えて分りやすく解説してくれました。

ブースは、スタッフを囲むように4つの長机に材料を広げて、椅子を昨年より2脚増やし、パイプ椅子14脚借用して、こちら側でスタッフも座って対応出来るようにと考えて配置して待ちましたが、親子連れがひと組寄り来ると、次々とよってきてくれて、あつという間に満杯に、椅子を外側に回して、全て使ってしまいました。それでもまだ待っている子が居たような状態だったので、「立ちながらも良いかな」と了解を得て、一時的には17人に5人のスタッフが掛け持ちで説明等に対応しました。結局スタッフは、館が準備してくださったお弁当を交替で食べた時間以外は、ずっと立ちっぱなしの一日でした。



会場作り、幟初お目見え



雲の模型指導

これまで、雲の模型は両面テープを鋏で切って貼るところから体験してもらっていたのですが、今夏のお天気フェア用に準備して置いたのが、だいぶ余ったことから、今年は両面テープが貼ってある台紙を使用しました。これだけでも効率が良くなって雲の模型を作ってくれた人は125人になりました。

手の空いた時間帯には、他のブースを覗きに行ってもらいました。他のブースの方も雲の模型作りに挑戦し

て貰いましたが、隣の坂口謹一郎博士顕彰委員会・新潟薬科大学からは、学生さんが、交替で来てくれて、「天気予報はどうやって行うのですか」等の質問に答えるなど、やりとりしながらの取り組みで充実した一日になりました。

去年は2歳のお子さんのチャレンジが最年少でしたが、今年はそれを上回る1歳の子が雲の模型を作ってくれました。

心配だったので本気かどうか、「やってみたい？」と聞いたところ「うん」と、にこにこ顔で答え、ベビーカーの上で綿を丸めて雲の模型を仕上げました。「将来予報士になってね」とねぎらうと「うん」と笑顔で答えお兄ちゃんとお母さんと一緒に会場を後にしました。

支部では、幟を今年作成しました。萌葱色の鮮やかな幟は室内でも良く映え、今回のイベントが初お目見えでしたが、呼び込みに一役買ってくれました。

閉会の挨拶で、永井館長は、来年はコロナ明けで、来場者が5,000人を超えることも考えられる、皆さんはそのつもりで今から準備をして頂きたいと、引き続き盛大な催しを期していました。

支部のブースにも、勤務明けに立ち寄って頂けた方も居られ、来年以降も期待できそうです。



1歳の女の子も雲模型に挑戦